大極殿院の設計思想と出土遺物の解釈

Concerning the Design Concept in the Imperial Audience Hall of State Compound and these Findings

内田 和伸*

Kazunobu UCHIDA

Abstract : In last year I guessed that the plans of the Imperial Audience Hall of State Compound were made by the bureau of astrology, calendar and divination “ONMYOU-RYOU”. On this paper I guessed the design concept and the thought with three enigmatic findings in the Imperial Audience Hall of State Compound. In the Fujiwara Palace, lotus pattern on the round eaves tiles compare the cosmos, and intertwining floral pattern on the flat eaves tiles express divination’s outlook on the world. In Nara Palace, the ornament tile of the earthen wall with brick tiles on the former imperial Audience Hall of state compound express the brilliant sunshine, which is an auspicious sign. In Naniwa Palace, the concentric circle design on the round eaves tiles compare the cosmos just like the astronomical chart of mural of Kitora Tomb, and its reverse figure “right” express the secure of peace on the world. The other flat eaves tiles compare the cosmos, its figure “+” express the center of the eccentric circle (ecliptic).

I think that the meanings of these findings are related to “ONMYOU-RYOU” and the ideology of the Ritsuryo state that conjecture was justified by this study on the findings in the Imperial Audience Hall of State Compound.

Keywords: the Imperial Audience Hall of State Compound, design concept, findings

キーワード: 大極殿院, 設計思想, 出土遺物

1. はじめに

平城宮第一次大極殿院前庭にある磚積擁壁は複雑な平面プランをなし、その端部や屈曲点は大極殿内の高御座中心からの同心3円と後殿前に中心をもつ偏心円との交点を使う。井戸や宝幢の位置も後者の円に規定され、キトラ古墳の天文図のような宇宙の構造を意図したものであった¹⁾。また、他の大極殿院の規模についてもその回廊心々間距離の尺長が易や暦に用いる聖数の倍数で構成されている可能性があることを指摘した。こうした状況から、大極殿院の計画に関わった技術者集団は天文・易・暦に関わる知識を持ち、数字に意味を見だして、それらを設計に用いたと考えることができ、彼らを陰陽寮の官人と推測した²⁾。

今回は大極殿院の景観の一部を構成した出土遺物である軒瓦と磚状飾板からその推測を後付けし、文献1)で言及されていない磚積壇の立面意匠についても復元的考察をする。本稿は出土遺物を中心にした考察であり、本学会の論文としては馴染まないと思われるかもしれない。しかしながら、現代においても空間計画にはコンセプトがあり、その具体化が設計であって、理念が建築や構造物の細部意匠にまで関わることは言うまでもない。大極殿院の設計手法やその背景にある設計思想についてはそれを示す直接的なテキストが伝世しない状況である。このため設計手法については検出遺構の検討により文献1)2)がある程度明らかにした。しかし、その設計手法をとらせた設計思想そのものについては十分には把握できておらず、その解明のためには建築や構造物に使われていた出土遺物を手掛かりに、場の意味を検討する必要がある。意味の解明が充分でない遺物を古代の宮殿やその前庭の設計思想という視点で新たに検討した時、遺物の解釈も可能になった。以下に検討した結果を記す。

2. 大極殿院出土遺物について

(1) 藤原宮および平城宮大極殿院出土軒瓦³⁾

藤原宮・平城宮第一次および第二次大極殿院出土の軒瓦は、軒丸瓦・軒瓦ともに数種類のものがみられるが、大極殿を飾っていたと考えられている代表的組み合わせを図-1に示した。

図-1 藤原宮・平城宮第一次・第二次大極殿院出土軒瓦³⁾
(2) 平城宮第一次大極殿院出土の磚状飾板

第一次大極殿前庭にある磚積擁壁の正面部を磚積壇と称し、その高さは2mを超える。この大極殿は奈良時代半ばに恭仁宮へ移築され、平城遷都後、東区には第二次大極殿が新たに造られる。第一次大極殿院の場所は擁壁の磚が抜かれ、壇上に後殿のみが一定期間残ったと考えられているが、内裏と並ぶ同規模の宮殿(西宮)に造り替えるため、壇前を埋め、高台を広げている。その壇下の埋土から瓦質の遺物が2点出土している(図-2)。

図-2 平城宮第一次大極殿院出土磚状飾板⁴⁾

これらは厚さ約3cmの粘土板に径15cmの円板を貼り付け、中央部に径8cmほどの突起をつける。突起は饅頭形に盛り上がるものと、截頭円錐形を呈するものがある。外側を破損し全形は不明で、それが何をデザインしたものかも不明とされるが、磚積壇の上端に積んだ裝飾磚の一種と考えられている⁴⁾。第一次大極殿の実質的な御披露目は遷都後五年の和銅七年(715)正月一日の朝賀とされる⁵⁾。以下ではこの遺物は磚積擁壁の一部を飾り、その時点までの設計思想に関係した意匠とみて検討する。

(3) 難波宮出土軒瓦

聖武天皇が再興した後期難波宮を特徴づける遺物に、重圈文軒

*奈良文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

丸瓦・軒平瓦があり、出土の軒瓦の約9割を占める。大極殿院でも重圏文軒丸瓦が出土している。この文様については瓦当文様の退化・省略とみる考えが強かったが、中尾芳治⁶⁾は「重圏文系屋瓦は、神亀三年十月にはじまる聖武朝難波宮の造営を契機に、新たなデザインとして案出され、生産されたもの」と指摘した。重圏文軒丸瓦は三重の同心円の文様をもち、その第一圏内に陽文で「右正字」や「右裏字」(図-3左)のものがある。重圏文軒平瓦は、2本の弧線を入れたもの、その両端を繋いだもの、さらにその中にもう1本の弧線を入れたものの三種類があり、瓦当中央付近に「十字陽文」(図-3右)のあるものも出土している⁷⁾。

図-3 難波宮出土軒瓦⁷⁾

3. 律令国家の思想

(1) 天命思想と天人相関⁸⁾

古代中国では、地上の本来の統治者は宇宙の統治者である昊天上天すなわち天帝と考えられた。しかし、地上を人でない天帝が統治はできないため、統治を委任することになり、天帝が命令(天命)を下し、受命した者が天子として地上を統治する。儒教は基本的に合理的な世界観をもっていたが、国の統一原理となるには不十分で、天子を神聖化するための脚色が必要であった。天命思想確立に大きな役割を果たしたのが前漢の武帝に徴用された儒者董仲舒であった。彼は君主権の強化によって専制国家体制を図ったと同時に、権力の強大化が秦の始皇帝のような専制君主の横暴を招き王朝の滅亡を招くことがないようにするため、儒教に陰陽五行説と天人相関思想を結合させた。天子は徳をもって地上を統治し(徳治主義)、それが天帝の意志にかなえば地上にめでたい徴、祥瑞をもたらす。天子が徳に欠け天帝の意志にかなわなければ天帝は不徳を責め、咎徴として地上に災害異変、すなわち災異をもたらすとする(『春秋繁露』「必仁且知篇」の定義によると、自然界にめったにない「変」を異といい、災はそのうちの小さいもの)。宇宙の万象は陰陽二気とそこから派生する五行から生ずるとし、二気が調和を失すると災害が起きる。自然と人事は感應するという考えからこの二気の調和不調和は為政者の徳不徳に反応するという帝王観を内包するのである。天子の不徳がさらに進めば天帝は他の者に天命を革め、他姓の者が天子となって(姓を易えて)王朝が交替する(易姓革命)。干支の上では甲子の年は革命の年、戊辰は革運、辛酉は革命と言われ、三革命という(なお、王朝の交替を意識した桓武天皇の長岡遷都は甲子革命、平安遷都は辛酉革命にあたる)。これが天命思想である。

隋・唐の律令に基づく専制君主制の基本となった思想は、上記のような天命思想から中華思想と王土王臣思想の二つの思想が派生する。前者は、天帝から統治を委託された天子の居するところは中国・中華・あるいは夏華と呼ぶ地上の中心であるとする思想。後者は、地上すべてのものは本来天帝のものであるから、それらは統治を委託された天子のものとする考えである。

(2) 古代律令国家と儒教の授受⁹⁾

『日本書紀』応神天皇十六年に、百済人王仁が『論語』を伝えたとある。これは実際には西暦405年にあたるとされる。5世紀後半の熊本県江田船山古墳出土太刀の銘文には「長寿子孫注得其恩」とあり、儒教の概念である「恩」はその傍証となろうか。

継体天皇七年(513)、百済の国王が五経博士段楊爾を日本に派遣した。3年後には、五経博士漢高安茂を派遣・交代し、以後、百済は新旧交替方式で五経博士を派遣した。

推古三十一年(603)、聖徳太子は儒教の徳目(徳・仁・礼・信・義・智)によって名付けた「冠位十二階」を制定、翌年には「十七条憲法」を制定した。第十二条は「王土王民」の土地国有制と天皇主権の中央集権を政治理想とする。「君・臣・民」の関係が定められ、第六条には臣たる道は「君に忠」「民に仁」とし、具体的には第四条に「礼を以て本とせよ」とある。こうした聖徳太子の理想は四十年後の大化の改新でようやく現実のものとなる。

孝徳天皇の大化六(650)年二月、白雉の出現で改元し、以後、祥瑞に関する記事は絶えず、奈良時代の改元は祥瑞と関わる。この祥瑞も儒学のみ天命思想と関わることであり、次節で述べる。

齊明朝・持統朝では服属儀礼の場合は楓の木であった飛鳥寺の西の広場であった。その消滅は藤原宮造営によりその中枢部に大宝元年(701)大極殿が成立したこと、天下の中心で天上世界との唯一の結節点である高御座の成立、天武天皇以降の現人神化とも関係すると考えられている¹⁰⁾。大極殿院は君臣の関係を再生産する場なのである。

なお、この年初めて藤原宮で釈奠(孔子を祀る儀式)が行われているが、これが制度的に整うのは奈良時代後半の吉備真備帰国後のことと考えられている。

(3) 日本における天命思想と天人相関

(i) 皇孫思想と天命思想の共存¹¹⁾

職員令の陰陽寮の職掌に天文密奏を定め、儀制令に祥瑞に関する条文を設けていることから明らかなように古代日本も天命思想を受容してきた。天皇が臣下に対して口頭で宣布するためにかかれた詔を宣命と呼ぶが、それを収録する史書では、宣命が編者によって改変された可能性はほとんどないこと、修辭が少なく天皇の心情を吐露したものがみられることを早川庄八は指摘する。早川はこの二点に着目し、8世紀の天皇の宣命を分析して、その背景にある思想を次のように考察している。

即位宣命の特徴としては、内容・構成において形式にとらわれることなく自由であり、かつ背後に存する思想には、天孫降臨神話に基づく皇孫思想と、この思想とは相容れないはずの外来の天命思想との、共存もしくは混在した状態が伺われるとしている。たとえば、文武の宣命では「高天原に事始めて…」と皇位継承について述べ、元正の宣命では、瑞物の出現を「天、嘉瑞を表わせり」とする。また、即位宣命ではないが、称徳の神護慶雲改元の宣命では、伊勢の外宮の上に五色の雲が湧いたことなどを、天命思想に基づく天人相関思想によって祥瑞としつつも、伊勢大神の慈しみ、天皇霊の慈しみ、三宝・諸天・天地の神たちが共に現したものであるとしている。このように天命思想は8世紀の天武系諸天皇の心の中において原理的に相容れないはずの皇孫思想とも対立せずに混在していた。それは天武直系の枠組み、ひいては皇孫思想という枠組みの中での矮小化された天命思想の受容であったためと考えられている。なお、文献1)では両思想の共存を同心三円とそれらより大きい偏心円が具象していると指摘した。

(ii) 祥瑞の内容¹²⁾

律令の儀制令にも祥瑞条が設けられているが、延喜治部式に載せる瑞式には、大瑞59種目、上瑞38種目、中瑞33種目、下瑞15種目のリストがあげられている。赤鳥、白雉、白狐、靈龜、木連理、慶雲、甘露など珍しい動植物と気象現象であり、唐と似た内容となっている。奈良時代の改元の折にはこれらの祥瑞が出現している。なお、和銅改元の産銅や天平21年の産金などは祥瑞条には合致しないものであるが、祥瑞に準ずるものとされた。本稿では祥瑞条になく祥瑞に準ずるものを「嘉応」(天が現すめでたい徴:『学研漢和大字典』)と呼ぼう。

祥瑞は現れるものだが、明らかに作為的に出現させたものがある。文字を伴うものである。①元明から元正への譲位による靈龜改元では、靈龜の腹に赤と白の斑点で八文字が書かれていた。②

長屋王事件の後、実権を握った藤原氏が、光明子立后に向けて亀の背に「天王貴平知百年」が記されていた。また、③藤原仲麻呂が権力をつけている天平宝字二年、大和の神山の奇妙な藤木（藤原氏を暗示）の根本に虫が「王大則並天下人此内任大平臣守皇命」と彫り出した。さらに、④藤原仲麻呂が光明皇太后、孝謙女帝の下で権力を確立し、大炊王（淳仁天皇）立太子の直前には称徳天皇の寝殿に「天下大平」が現れた。⑤橘奈良麻呂の乱が藤原仲麻呂により事前に鎮圧された直後には駿河国益頭郡で蚕が卵で「五月八日開下帝釈標知天皇命百年生息」と文字を綴った。①②は文字を伴っているものであるが、祥瑞である霊亀である。一方、③④⑤は祥瑞の規定にはない嘉応で、文字を伴う。特に⑤に関してはその意味を天皇が群臣に議論させたところ、その日は太上天皇の一周忌のために法会を設けて悔過の終わる日で、帝釈天は天上界の門を開け、地上界の天皇の優れた仕事をみて天皇の御代が百年続くことを表したものと、臣下は奏上している。そして、天皇は減税や授位を実施した。

いずれの場合も動植物や自然現象といった象徴的なものだけでは政治に直接結びつく具体的なメッセージにはならないため、文字・文章を伴うのである。

（４）律令国家の思想と富本銭¹³⁾

富本銭は飛鳥池遺跡の発掘により和同開珎より古い銅貨であることが確定した（図－４左）。古代中国では、その円形方孔銭の形は「天円地方」を表し、天と地の調和のとれた姿を示すと考えられていた。また、七つの点で示される七曜文は、陰（月・地）と陽（日・天）の間で木、火、土、金、水の五行（五星、五気）が順序正しく循環する状態を画像化したものという。このような意味は、富本銭に続く和同開珎の「和同」と共通し（図－４右）、その出典は儒教教典『礼記』や道教教典『淮南子』などに求められ、『礼記』では「天地和同，而万物萌動」のように調和のとれた状態を意味するという。

「富本」は、『晋書』食貨志に「富国之本，在於食貨」や『東觀漢記』に「富民之本，在於食貨」とある。富国・富民のものは食貨にあるという考えは『書経』にあり、食物が充足して、貨幣を利用した交易によって物資が流通すると国力が充実して民が豊かになり、民の教化が成し遂げられるという「富国安民」の儒教思想に基づくものであり、帝王の政治哲学であるという。

このように銭のデザインと銭が発行されたこと自体が建設の進む律令国家のイデオロギーを表すものと考えられており、思想が物のデザインに反映される事例として注目されるのである。

図－４ 富本銭（表・裏）と和同開珎（表・裏）¹⁴⁾

4. 大極殿院出土遺物の解釈

（１）藤原宮出土軒瓦の解釈

古代中国では秦の始皇帝以来、宮殿は宇宙を象ると考えられてきた。宣化遼壁画墓の天井壁画（図－５）では天の北極に蓮華文、周囲には黄道二十八宿を配したことに見られるように、蓮華文は宇宙の象徴と考えられていた¹⁵⁾。そして、こうした思想を受容したためであろう、寺院だけでなく藤原宮以来宮殿の軒先も蓮華文が飾りようになる。藤原宮大極殿院の軒丸瓦は中房に蓮子 15、弁の外側に珠文 40 を配す。奈良時代の陰陽生が学ぶべき官撰の漢籍で、秦から隋の陰陽五行説の集大成である『五行大義』では、15 は 1～5 の生数の和、40 は 6～10 の成数の和とし、55 は天地創造の数とされる。中房の蓮子 1+5+9 は、中心の 1 点から周囲を均等に分割していく方法では配置しにくい。敢えて 5 や 9 を用いていることから数字に意味を考える視点が必要であることは既

に文献 1) 2) で指摘した。また、40 については平城宮第一次大極殿前庭にある磚積擁壁の設計の基準単位となっていることを指摘し、中国的な方向感である 5 と天皇が支配する国土の方向感の 8 を掛け合わせたものという考えを示した。

こうした数値とその積についての記述は『続日本紀』天平宝字元年八月十八日条にもみることができる。この日、天平勝宝九歳を改めて、改元しているが、その詔の中でも触れられている。前章で述べたように蚕が卵で「五月八日開下帝釈標知天皇命百年生息」と文字を綴った。天皇は五月八日の五と八の数字を並べて掛けるならば、天子の聖寿の不惑（四十歳）に通じ、日と月はともに明るく、皇室の末永い繁栄を象徴するというのである。こうした天皇の言葉は単なる個人的な思いつきではなく、編者を含む官人層の認識に共通するものとみるのが自然であろう。

藤原宮の軒丸瓦と組む軒平瓦のデザインは嘗て天星地水といわれたことがある。上外区の点は星、下外区の鋸歯は地を、さらに詳しくみるなら、唐草文は地上の波、その上下に風と渦、すなわち全体では天地人を表現したと考える。『易』繫辭上伝には「易は天地を準う…仰いでもって天文を觀、俯してもって地理を察す」とあり、デザインの背景に易の思想を看取できる。唐長安城の大極殿や両義殿の名称も『易』繫辭上伝によるのである¹⁶⁾。

これらの瓦のデザインについては宇宙を意識したものと同時に易の思想を示したものと思われる。

図－５ 宣化遼壁画墓天井壁画¹⁷⁾

図－６ 日暈文軒瓦¹⁸⁾

（２）平城宮第一次大極殿院の磚狀飾板の解釈 ～暈と暈～

磚積壇下で出土している同心円状の遺物に似たものに、高麗時代に始まる「日暈文」と呼ばれる文様をもつ軒瓦がある。これは中央部が饅頭型に盛り上がり、周囲に同心円状の段がつくものであり、組む平瓦には天下太平と記されたものもある¹⁸⁾（図－６）。この文様を端緒に磚狀飾板の性格を考えよう。

（i）中国の史料にみる日暈

日暈については、中国歴代王朝の正史にある天文志などにその観測記録が多く記されている。

『史記』「天官書」¹⁹⁾には「兩軍が相對し、日暈が出て暈氣の周囲が等しければ力が均衡し、厚く長大なら勝ち、薄く短小なら負ける。（中略）。天に白虹が現れ屈んで短かければ、その下に大流血がある。（略）」と記される。

『新唐書』「卷三十二志二十二天文二」²⁰⁾には、「天寶三載正月庚戌、日暈五重。占曰…「是謂棄光，天下有兵」とある。

『南齊書』志第四天文上²¹⁾には「永明四年五月丙午、日暈再重、仍白虹貫日、在東井度。」や、「永明九年正月甲午、日半暈、南面不匝、北帶暈生一抱、東西各生一珥；抱北又有半暈、抱珥並・色；北又生白虹貫日、久久消散。」とあり、東井（黄道上の星座）の位置で二重の日暈に虹色の光が貫いたこと、半分の日暈が懸かり東西に耳飾り状の光が生じたことなどが記される。虹色の光が日を貫くことについては「大明二年至元徽四年、天再裂。占曰『陽不足，白虹貫日，人君惡之。』」とあることから、祥瑞ではなく、讖緯として捉えていたと思われる。

漢代の出土遺物では『馬王堆漢墓帛書』「刑德甲篇」²²⁾に、「日重暈、軍畏。」「有暈、軍疲、客勝。」などとあり、『史記』「天官

書」以来、日暈は軍隊が疲れ、負けるなど不吉なことの暗示となっているようである²⁵⁾。

(ii) 『続日本紀』にみえる日暈

元正天皇の養老五年(721)二月七日程には地震があったことが記され、次の記事十五日条には大蔵省の倉がひとりでに鳴り、人の声がしたとあり、その次の二月十六日程には太陽に日暈がかり、白い虹が日を貫いたように見え、日暈の南北の端に耳飾りのような輪があったとする。そして、天皇は自分に徳が少なく、民を導けない、国家の良策があれば奏上するように述べ、自分が退出した後で悪口を言うなとまで詔した。翌日、天皇は施政が正しくない時、洪水や干魃のような災害が天の戒めとして現れると述べた。日暈もその前兆の一つであったのである。

(iii) 『古事記』の序にみえる暉

前述のように中国では日暈を災異の兆しとして受け止めており、『続日本紀』も同様であった。ところで前述記事の九年前にあたる和銅五年(712)成立の『古事記』ではどうであろうか。

『古事記』序の太安万侶の古事記撰録には和銅五年正月廿八日付けで、「伏して惟ふに、皇帝陛下、一を得て光宅し、三に通じて亨育したまふ。紫宸に御して徳は馬の蹄の極まる所に被び、玄扈に坐して化は船の頭の速ぶ所を照らしたまふ。日浮かびて暉を重ね、雲散りて烟に非らず。柯を連ね穂を并す瑞、史書することを絶たず、烽を列ね譯を重ねる貢、府空しき月無し。名は文命よりも高く、徳は天乙にも冠りたまへりと謂ひつべし。」とある²⁴⁾。天皇が皇位に就いてから徳が天下に満ち、天地人にわたり万民万物を化育しているとする。それに続いて、祥瑞の例を列挙している。元明天皇の聖徳に感応して太陽が輝きを増すこと、雲でもなく煙でもないもの、連理の枝や一本の茎に多くの穂が出ることなど、書記官は絶えず記録しているというのである。「暈」の字は『古事記』には用いられておらず、「暉」を祥瑞として捉えているのである。この序文を記した和銅五年、太安万侶は「暉」を祥瑞とするが、これは編者だけの個人的な認識ではなく、この頃の官人層の認識とみるべきであろう。祥瑞の例示の一番始めに「暉」を挙げていることは注目してよい。

(iv) 語義と学術用語

『説文解字』を見ると、「暈」の字は「日月気也。従日軍聲」とあり、「暉」の字は「光也。従日軍聲」とある。

『角川大辞源』にみると、「暈」の字は「かき」・「くま」と読み、和訓で「ぼかす」。意味は、①かさ。太陽や月の周りに薄く現れる光の輪。②くま。光や色彩の周りに淡くにじんだ部分。③めまい。目がくらむ。一方、「暉」の字は「かがや」く・「ひかり」と読み、意味は①かがやく。ひかりかがやく。②ひかり。日のひかり。

このように字が異なるのであるから当然であるが、日の位置で意味が異なるのである。遠回りをしたが、高麗時代の屋根を飾る瓦の文様を「日暈文」と名付けたこと自体が不適当であったのであろう。別に、この瓦は鬼目文、圓圈文、蛇目文、暉眼文、日暉文とも呼ばれている²⁵⁾。

なお、学術用語としては同系色の色を濃い色から淡い色へ段階的に配列する技法で暈かしの効果を狙ったものを暈縹文という。奈良時代に隆盛を極め、建築、工芸品、彫刻、錦などの染色品に多用された。『続日本紀』和銅六年には暈縹染を作り、授位、賜物にあずかった人物に関する記事がある²⁶⁾。

太陽が光り輝いている様「暉」を和銅五年正月『古事記』の完成した時点では、めでたいこととして捉えていた。しかし、延喜治部省式祥瑞条にはそれは記されていない。水口幹記は「祥瑞品目のランク分類された治部省式は大宝令施行当初はまだ存在しなかったが、慶雲期遅くとも和銅期には治部省に備えられていた」と指摘している²⁷⁾。水口の指摘する通り、それを『古事記』完成

の和銅五年正月以降、あるいは第一次大極殿院完成後に初めて行われた朝賀とみられる和銅七年正月以降の和銅年間とすれば、それまで祥瑞と考えられていた「暉」が、治部省式で脱落した可能性も考えられ、その祥瑞観は前時代からの意識を引き継いだ太陽観に基づくものだったの可能性が指摘できるのではなかろうか。

(v) 装飾古墳における同心円の解釈について²⁸⁾

では、前時代の意識を装飾古墳の壁画に探ってみると、太陽を描いたと考えられている文様がいくつか存在している。九州の装飾古墳の中でも初期のものには円文や同心円文がしばしば彫刻され、呪術的意味をもつと考えられている。福岡県の石人山古墳の棺蓋、熊本県の千金甲一号古墳の石障(図-7左)、福岡県の日ノ岡古墳奥壁などである。また、舟が他界へといざなうという舟葬観念を背景に舟と共に描かれた同心円文は太陽と考えられている²⁹⁾。一方、福井県の小山谷古墳の舟形石棺蓋(図-7右)には中心に小突起のある円文が浮き彫りされており、鏡と鈕を表すものと考えられている。辟邪としての鏡である。

図-7 千金甲一号古墳石障(左)と小山谷古墳舟形石棺蓋(右)³⁰⁾

(vi) 磚状飾板の解釈と磚積壇立面の復元的考察

問題としている磚状飾板はその中央部がふくらむ形態をしている。鏡と鈕の形態をデザインしたものならば鈕を通す孔の表現があるはずであるが見あたらない。このため磚状飾板の文様は古墳時代からの意識を引き継いだ、太陽がきらめく様を示したものだと思われるのが妥当であろう。その中央部の形は奈良時代からは降るが高麗時代以来の「日暈文」が参考になるであろう(ただし、時代と場所の離れた両者の文化的関連については今後の課題としておきたい)。磚積壇の天端付近にこれを飾るのであろうが、磚を布積みした中に収めなければならないため、その外形は方形となるはずで、全体としては「天円地方」を象ることになる。磚積擁壁は約70度の勾配をもつ。北緯34.7度の奈良において、夏至正午の太陽高度は23.4度を加えた78.1度、春分・秋分では55.3度であるし、擁壁は北に転んでいるため太陽高度とは関わらないのかもしれない。磚積擁壁の高さは7尺から8尺であり、その勾配は8尺上がりの3尺転びの勾配でもある。古代中国において(厳密には時代によって基準尺の長さが異なるが)、8尺は方位を割り出したり、太陽高度を測るために立てた棒(「表」ないし「圭表」という)の長さである。磚積擁壁の平面形の設計方法が解明できていなかった時点では、折れ曲がる形などから北斗七星との関係などを指摘し、高さは7尺であろうと推測した³¹⁾。現在も高さを断定することはできないが、3と8の数字の積に意味を見いだすことはできる。すなわち、3は前述した太安万侶の古事記撰録にもみえる天地人の三者で、天地が相通じると天下泰平と考えられていた。8は天地の結節点に位置する高御座の形や、天皇が支配する方向の象徴である。前述した『続日本紀』天平宝字元年八月十八日程で月と日付の数の積に意味を持たせたように、3掛ける8で24、二十四は太陽の位置で決まる二十四節気と関連する。これはいつの季節にも太陽が光り輝いて嘉応を現し、天皇の支配する天下に天皇の徳が行き渡り、天下泰平をもたらすものと考えたことによると思われる。磚積壇東西長332尺で24個を、10数尺の間隔程度で配するのではなかろうか。閏月のない

年間の月の数と関わらせば間隔は12尺となる。

平城宮第一次大極殿院に大きな影響を与えたと考えられている唐長安城大明宮含元殿の前面の磚積擁壁や大明宮麟徳殿の基壇などには皇帝の象徴たる龍首が飾られていた。第一次大極殿の大基壇たる磚積壇には太陽神天照大神の子孫たる天皇を象徴する、「日暈文」ならぬ「日暉文」が飾られていたと考えられる。

(3) 難波宮出土軒瓦の解釈

櫻井久之³²⁾は三重の圈線直径とキトラ古墳の天文図の内規・赤道・外規の推定半径を詳細に比較検討し、その比率の近似から三円は天文図の三円を意図したものとみる。また、正倉院南倉の十二支八卦背円鏡(第13号)の意匠も同じ主題で製作され、共通する世界観・宇宙観を表現したものと考えられている。さらに、重圈文軒丸瓦中央にみられる珠点と重圈文軒平瓦の瓦当部中央付近にみられる「十字陽文」はともに北極星を意味するものとするが、「右裏字」の意味は不明とする。

櫻井が指摘する通り、軒丸瓦の三円は天文図のそれを意図したものともて間違いはないだろう。また、重圈文軒丸瓦中央にみられる珠点を北極星とみることに異論はない。しかし、重圈文軒平瓦の瓦当部中央付近にみられる「十字陽文」も北極星とみることは、組み合わせて用いる丸瓦で中央に珠点として表された北極星があることと齟齬をきたす。意味不明とした「右裏字」と併せて以下に筆者の見解を示したい³³⁾。

周の数学書『周髀算経』の宇宙論は、天は傘のようで地は碁盤のようとする蓋天説をとる。漢代以降は、日月五星(七曜)が天球上を右(東)へ動いている天体現象を、天は左(西)へ廻っている雌、日月五星はその上を右へ這う蟻に喩え、熒惑(火星)の逆行現象(地球に近い外惑星であるため地球との位置関係で戻るように観測される現象)は不祥とした³⁴⁾。七曜が右へ廻る天の順調な運行は天下泰平の条件である。軒丸瓦は透明な天球(天蓋)に内側から記した右の字を天球の外側からみたデザインである。古代中国では、天は見上げる存在から絶対的境地をもって見下ろす存在となり、後の精神文化に大きな影響を与えた。平勢隆郎³⁵⁾は、その転換の時期を紀元前4世紀半ばとしている。天帝の視点である天球の外側から視点は、天体観測機器である渾天儀の発明と導入によってその擬似的視覚体験を容易にしたと思われる。天球の外側から天を見る視点があったことは、後漢墳墓武梁祠の画像石や北朝鮮の支石墓の天井石、正倉院御物北倉の呉竹鞘杖刀刀身、四天王寺の七星剣刀身、法隆寺金堂にある持国天の模造七星剣刀身、式盤(陰陽師が使う道具)等に北斗七星が裏側に描かれていることから知られる³¹⁾。正倉院御物中倉の青斑石龜合子(図-8)の蓋である背に描かれたものは、典型とも言えるであろう。

図-8 青斑石龜合子³⁶⁾

『万葉集』『藤原宮の役民が作る歌』にある“図(あや)負へる奇しき亀”も、このようなものだったに違いない。古代中国では亀は大地を負うと考えられていたために、正倉院御物の木画紫檀某局の碁石を入れる引き出しには亀が象られており、碁盤目で象徴される大地を負う形となっているのである。亀が星を背負うのは大地と天蓋が相通じ、一体化したデザインなのである。

なお、梁以前の詩と散文を集める『文選』『七命八首³⁷⁾』では「飛陞山を陵ぎ、玉繩(北極星付近の小星)を望んで極(棟)を結び、倒景を承けて軒を開く」とあり、楼閣の高い梯子が天球に

達すると、天球を外から見た「倒景」をみることができるのである。「軒に開く」と読めば軒瓦に倒景が飾られることになろうか。

「右裏字」は、七曜の右への順行を願って透明な天球に内側から描いた右の字を、天帝が外側から見て、その了承を示すために下した嘉応をデザインしたもので、天皇の徳が及ぶ天下の安泰を示すと考える。右正字も同様で、天帝に見やすいように裏字で書けば正字になって下されるものであろう。天平宝字二年八月一日淳仁即位宣命にみられるように、「日月の運行は常に正しく、それによって天地は相通じあって安泰」と考えられたのである。先に、文字を伴う祥瑞をみたが、祥瑞条にないめでたい徴「嘉応」はやや複雑な内容を具体的なメッセージとして伝えるために考え出されたものなのである。

十字陽文は、軒平瓦の中心を外している。天の北極は歳差運動によって天球上の位置を移動しており、2002年に現在の北極星(こぐま座の α)に最接近し以後は遠ざかっている。1300年前の現北極星は現在よりも極から離れていた。その意味においてなら十字文を北極星と考えることも不可能ではない。しかし、同心円の中心を外す意味を重視すれば十字文は偏心円で表される黄道の中心の象徴であり、黄道の極には星がなかったために珠点ではなかったと理解できよう。十字文を記す重圈文軒平瓦は同心三円の一部分か、それを変形させたものと考え得るのではなからうか。

なお、同心円状の形態をなす遺物を宇宙構造と関連して解釈しようとする時、『周髀』に示されている宇宙の構造図である七衡図の検討も必要である(図-9)。これは中心の観測地点から二十四節季ごとの感覚的な太陽の距離を表したもので、第一圏が夏至の太陽の位置、第四圏が春分と秋分の太陽の位置、冬至は第七圏である。七衡図と他の重圈文軒瓦の関係についてはさらに検討も必要であろうが、難波宮のそれについては内規・赤道・外規と考えられ、宇宙を象ったものとみてよい。

図-9 七衡図 図出典³⁸⁾

5. 大極殿院と陰陽寮

(1) 陰陽寮とは³⁹⁾

齊明天皇の六年(660)五月条には、「皇太子(中大兄皇子)、初めて漏刻を造り、民をして時を知らしむ」とある。この遺構が飛鳥の水落遺跡である。天武四年(676)には天文占の施設と考えられる占星台が造られているが、この年が陰陽寮の初見であり、この時までには陰陽寮が成立していたと考えられる。一方、陰陽師の初見は天武十三年(685)である。陰陽寮は中務省の被管官司で、頭、助、允などの事務官と陰陽博士、暦博士、天文博士、漏刻博士などがおり、天文気象現象の吉凶・妖祥の観測とその密奏、造暦、漏刻の管理と報時、卜占、相地、それに陰陽生、天文生、暦生の教育が職掌である。密奏とは陰陽頭とよばれる陰陽寮の長官の特別な任務で、天変地異があれば天皇に密かに報告しなければならないものであった。それは前述した通り、天子の不徳が災異として出現すると考えられていたため、天皇の評価にあたることになるためである。

唐の官制では、天文・暦・漏刻を管掌する太史局と、卜占を管掌する太卜署に分かれていたが、日本ではそれらをあわせて陰陽寮一官司とした形となっている。唐官制にくらべト占部門が重視され、一方、漏刻博士は事務官として位置づけられているなど漏

刻部門が軽視されている点が特徴である。

（２）陰陽寮と宮地の相地

天武天皇は天武天皇十三年（684）二月二十八日、陰陽師らを畿内に派遣し宮都候補地を探索させ、三月には宮室（藤原宮）の地を確定している。

2001年の藤原宮大極殿院の発掘調査⁴⁰⁾では、大極殿院東門の北東で大極殿院東門の北東で天地、四海、地水火風などの陰陽五行説に関連する文字が多く記された須恵器皿が出土し、造営に係り呪術的な行為が行われた可能性が高いと考えられている。

『続日本紀』和銅元年二月、平城遷都の詔の中では、「今、平城の地は、四禽図に叶い、三山鎮を作し、亀筮並びに従う、宜しく都邑を建つべし。」と記しており、このときまでに陰陽師が平城京の地をみたことは確実である。

『続日本紀』延暦三年五月には、藤原朝臣種継が陰陽助外従五位下船連田口などを伴って、長岡の地をみている。

以上のように、陰陽寮は相地、すなわち宮都造営の基本構想である立地計画に深く関わり、造成工事施工段階でも呪術によって関わっていた可能性が指摘できるのである。計画段階での関与の可能性も高いと思われる。

6 まとめ

意匠の意味が十分には明らかでない大極殿院出土の軒瓦からその意味を推測した。平城宮第一次大極殿院出土の磚状飾板では意味を推測し形態の復元をし、それは日暉文といえるもので、天皇の徳治がいつも嘉応をもたらすことを象徴していると考えられる。蓮華文の軒丸瓦は宇宙を象徴し、平城宮へも引き継がれる。藤原宮のそれは蓮子の数などに易の思想を端的に示す。難波宮の軒瓦は天文図と天帝が応答した嘉応をデザインしたもの。いずれも当時の宇宙観と嘉応を示すためのものである。そのデザインに関わるのは天文・易・暦を職掌とする陰陽寮の可能性が高い。『続日本紀』文武天皇大宝元年八月二日条には三人の僧が還俗させられ、本姓に復したことが記されるが、三人は『正倉院文書』の「官人考試帳」に陰陽寮の官人として名を連ねており、官人に任命するために還俗させたものという⁴¹⁾。时期的に磚積擁壁の設計者は彼らであろう。

では、陰陽寮を使って宇宙や嘉応をデザインするのは、なぜだろうか。一つには始皇帝以来、宮殿は宇宙を象るものという考えが伝わったことがあるだろう。二つには、宇宙の構造と原理を帝王学を通して理解した天皇が、暦の頒布で時間をも支配し、天下を統治する正当性と徳を示すためであろう。大極殿院の殿庭が使われる即位儀や元日朝賀では、君臣の身分秩序が臣下の着衣の色や高御座の天皇との距離で視覚的にも明確にされ、その関係が再生産されるのである。そこでは天武系天皇が天命思想も皇孫思想も駆使して正当化に用いた物証を建物の軒先や擁壁までもに飾り立てたのである。

「革命」後の桓武天皇の平安宮では天武色を薄めるために、大極殿は桁行11間と巨大化し、大極殿院南門は撤去され、朝堂院の正殿となる。郊祀などと併せ、天智系皇統による支配正当化の顕示である。その背景には儒教教典『春秋公羊伝』があるようであるが、他日を期したい。

参考文献および註

- 1) 内田和伸（2003）：平城宮第一次大極殿院前庭のデザインとその思想：ランドスケープ研究66（5）、361-366
- 2) 内田和伸（2004）：大極殿院の規模とその思想・計画・設計に関する一考察：ランドスケープ研究67（5）、361-364
- 3) 小谷徳彦（2003）：大極殿院の調査－第117次：奈良文化財研究所紀要2003、奈良文化財研究所、82-83、岡本東三（1981）：瓦磚：平城宮発掘調査報告XI：奈良国立文化財研究所、115-126、佐川正敏（1993）：2屋瓦：平城宮発掘調査報告XIV、96-129

- 4) 岡本東三前掲書3）129 なお、この出土遺物は『年中行事絵巻』の平安宮大極殿の図にその前庭の龍尾壇とその上部に高欄が描かれていることから、高欄の柱底部の安定のために用いられた可能性もあるだが、部材の厚さが少ないように思われる。また、類似品は大極殿から離れた平城宮内の基幹排水路で内裏東外郭を流れる東大溝や長屋王邸でも出土していることを付記しておく。
- 5) 渡辺晃宏（2003）：日本古代宮都の官衙配置の研究：科研成果報告書、8
- 6) 中尾芳治（1995）：難波宮の研究：吉川弘文館、258-259
- 7) 櫻井久之（2003）：重圀文瓦の意匠について：水野正好先生古希記念論文集文化財学論集 第一分冊、文化財学論集刊行会、225-234
- 8) 早川庄八（2000）：天皇と古代国家：講談社学術文庫、221-222、串田久治（2003）：儒教の智慧：中公新書172-175、東野治之（1969）：飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想：日本歴史第259号、吉川弘文館、49-60、関晃（1997）：日本古代の国家と社会：律令国家と天命思想、吉川弘文館、140-164
- 9) 王家驊（1995）：古代日本の儒学：日中文化交流史叢書 第3巻思想、大修館書店、39-82
- 10) 仁藤敦史（2003）：首都平城京－古代貴族の都鄙観念－：古代王権の空間支配、青木書店、205-238
- 11) 早川庄八（2000）：天皇と古代国家：講談社学術文庫、192-230
- 12) 関晃前掲書8）
- 13) 松村恵司（2002）：富本銭をめぐる諸問題：季刊考古学第78号、32-36
- 14) 松村恵司（2002）：富本銭出土遺跡考：文化財論叢Ⅲ：奈良文化財研究所：133、平城宮跡発掘調査報告Ⅵ（1975）、奈良国立文化財研究所、PL99
- 15) 林巳奈夫（1987）：古代中国における蓮の花の象徴：東方学報第59冊、京都大学人文科学研究所
- 16) 狩野久（1977）：律令国家と都市：大系・日本国家史Ⅰ：東京大学出版、217-254
- 17) 図出典 文物（1975）：1975年第8期：文物出版社、44
- 18) 図出典 後掲書25）
- 19) 司馬遷 小竹文夫・小竹武夫訳（2000）：史記天官書：ちくま学芸文庫、131-132
- 20) 新唐書：卷三十二志二十二天文二：中華書局、833
- 21) 南齊書：志第四 天文上：中華書局、203-208
- 22) 刑徳甲篇：馬王堆漢墓帛書：文物出版社
- 23) なお、林巳奈夫は『中国古代の神がみ』（吉川弘文館2002）「日の神」の章、日暉の部分で日暉の写真を掲げ、太陽の上と横の部分が輝く気象現象を捉えて、浙江省南部の河姆渡で出土した紀元前六千年紀から五千年紀の骨製匙の柄にある双鳥の文様を日月の暈としている。
- 24) 青木和夫・小林芳規（1988）：古事記：日本思想体系1、岩波書店、15
- 25) 朴銀卿（1988）高麗瓦當文様の編年研究：考古学研究学志第四輯、東亜大学校博物館、120
- 26) 正倉院事務所編（1988）：正倉院宝物中倉：朝日新聞社、54
- 27) 水口幹記（1997）：延喜治部省式祥瑞条の成立過程：史観：早稲田大学史学会編、51-65
- 28) 小田富士雄（1974）：図形文様の種類とその意義：古代史発掘装飾古墳と文様、講談社、98-106
- 29) 辰巳和弘（2002）：古墳の思想：白水社、36
- 30) 図出典前掲書28）42、26
- 31) 内田和伸（2002）：遺跡の遺構解釈と整備における文脈について：ランドスケープ研究、日本造園学会、421-426
- 32) 前掲書7）
- 33) ちなみに「右廻り」に関して『古事記』にみる国生みの話では、伊邪那岐命は伊邪那美命に天の御柱を回って結婚しようと言い、さらに続けて「汝は右より巡り逢へ。我は左より巡り逢はむ」とする。『春秋緯』「天は左旋し、地は右動す」、『医心方』元命包に「天は左転し、地は右廻す。…男は左転し、女は右廻すべし」とあり、天の御柱は北極星を柱に見立てた表現の可能性が考えられており（勝保隆（2000）『星座で読み解く日本神話』：大修館書店：75-77）、これが高御座につながるのであろう。
- 34) 橋本敬造（1993）中国占星術の世界：東方書店、29、148
- 35) 平勢隆郎（1996）中国的宇宙観の出現：講座文明と環境第5巻、朝倉書店、193-201
- 36) 図出典前掲書26）12
- 37) 新釈漢文大系 文選（文章篇）上（1997）：明治書院、166-169
- 38) 図出典前掲書34）33
- 39) 西口壽生（2000）：漏刻制と陰陽寮：飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ、123-140
- 40) 西口壽生（2003）：大極殿院の調査－第117次：奈良文化財研究所紀要2003、奈良文化財研究所、78-84
- 41) 岡田芳朗（1996）：日本の暦：新人物往来社、72-73